

ジャンルとプロフィシエンシー研究：

目的を効果的に果たす能力を考える

岩崎典子（南山大学）

キーワード：ACTFLガイドライン、プロフィシエンシー、ジャンル

1. はじめに

ACTFL（全米外国語教育協会）が口頭運用能力を測るために開発した OPI（Oral Proficiency Interview）、並びに、読む、聞く、書く技能を含む4技能の ACTFL ガイドライン（言語運用能力基準）は、北米のみならず、世界的に外国語教育や第二言語習得研究の分野で大きな役割を果たしてきた。しかし、外国語学習者も学習環境も多様化した今、多様化した学習目的を念頭に、ACTFL の基準によるプロフィシエンシーを見直す必要があるのではないだろうか。本発表では、「ジャンル」という概念を参照して学習者の目的に沿うプロフィシエンシーを考えることを提言する。

1. 1 OPI が測る言語運用能力

ACTFL の言語運用能力基準では、現実生活において何ができるかによってどのレベルであるか記述されており、その運用能力を「プロフィシエンシー」と呼ぶ。すなわち、学習者がどのレベルのタスク（機能）を遂行できるかでレベル判定がなされる。例えば、口頭能力に限ると、中級では、具体的な話題について日常的会話のやりとりができること、上級では、最近の出来事や個人的な関心事などについて詳細に描写したり叙述したりでき、不測の事態で状況説明をして込み入った依頼などをして問題解決ができること、超級では、専門分野について議論したり、意見を明確に表明して裏付けたりすることができれば、そのレベル基準を満たすと見なされる。さらに、2012年のガイドラインに新たに加えられた卓越級は、「広い範囲にわたって、全世界の包括的な問題や高度な抽象概念について、文化的に適切な形で意見を述べる」ことのできるレベルとされる。しかし、このうち、中級・上級のタスクは、日本語の学習目的を問わず遂行できることが望ましい機能と考えられる一方、超級や卓越級のタスクは、アカデミックな場面や特定の職種では遂行できるのが望ましい有効なタスクであるものの、必ずしも全ての日本語学習者が遂行できることを目指すタスクとは言えない。

ACTFL のウェブサイトの 2012 年の基準には、“The Guidelines are intended to be used for global assessment in academic and workplace setting”とあり、アカデミックな場面の言語運用に留意したものであることは明らかである。その一方、“workplace”がどのような職場かは明らかにされていないが、例えば、上述の卓越級レベルのタスクを遂行することが期待される職場はかなり限定的であろう。

1. 2 多様化する日本語学習者の学習目的や職場

ACTFL の言語運用能力基準では重視されていなくとも、別の場面で求められうる、高度な言語運用能力があるのではないだろうか。例えば、コミュニティでの人間関係構築が日本語使用の目的であれば、人となり・アイデンティティの表明、人への気遣い（慰め、応援）、娯楽的談話（ユーモアの共有、人を楽しませる経験談）のための言語運用が役立つであろう。どれも高度な言語運用能力である。

現在、多様化した学習者の目的を重視した目的別の会話テスト、JOPT (Japanese Oral Proficiency Test) の開発が行われている（鎌田・嶋田・伊東・李 2016）。目的別に、アカデミック、ビジネス、コミュニティに加え、さらに、介護領域も新たに加わったという。鎌田・嶋田・伊東・李（2016）では、ア

カデミック、ビジネス、コミュニティの機能的運用能力として、以下のような能力をあげている。

- アカデミック：グラフなどを読み解いた上で、事実の説明、解釈、評価を述べたり、自然法則や学術的な規範や規則等に基づいて根拠に基づく主張や議論ができる
- ビジネス：職業人として社会的・文化的に相応しい日本語で表現できる。さらに、商習慣を踏まえた上で、現在あるいは将来の展開を予測し、対応できる
- コミュニティ：(生活場面で)文化背景や状況を理解した上で、状況や事実関係、経緯などについてそれに相応しい日本語で描写・説明でき、さらに、テーマに即した意見述べができる。生活場面において人間関係に配慮した相応しい応答ができる

このような目的別機能的運用能力の設定は、従来の基準に比べ、多様化した学習者の指導や能力の判定に、より適合したものと言える。しかし、「主張」「議論」「商習慣を踏まえた将来の展開の予測」「人間関係に配慮した応答」などの機能運用力を測るには、それぞれの機能の能力の理解が前提となる。

2. 機能的運用能力の理解への提言

2. 1 「ジャンル」の有用性

「ジャンル」は、New Rhetoric 学派、目的別英語 (ESP: English for Specific Purpose)、体系機能言語学 (SFL: Systemic Functional Linguistics)の研究で扱われ、英語のライティングの教育で重要な役割を果たす概念である (Hyland 2007, Johns 2008)。社会的目的別のテキスト (例えば、「報告」「描写」「叙述」「説明」など) には、それぞれ構成や語彙の使用に社会文化的パターンが認められ、そのような社会的目的別のテキストの類別を「ジャンル」と呼ぶ。第二言語の教育関係の研究においては、主に英語のアカデミック・ライティング教育のためにジャンルが参照されることが多い (Hyland 2008, Paltridge 2013)。Feak (2013) は、ESP ではライティングが偏重されると指摘し、スピーチ・ジャンルの重要性を解く。しかし、Feak の焦点もアカデミックなジャンルで、取り上げているスピーチ・ジャンルは学会発表である。学会発表は、ある意味、書き言葉に近い話し言葉と言える。書き言葉と話し言葉は連続性を成すものであり、McCarthy (2001)は、書き言葉と話し言葉の連続性を意識し、“speakerly language”に対して“writerly language”いう表現を用いて、話し言葉らしさ、書き言葉らしさの度合いを表現している。それゆえ、「ジャンル」という概念は、ライティングだけではなく、スピーキングにも応用できると考えられる。

2. 2 領域別にそれぞれのジャンルに重要な効果は何かを考える

これまでのジャンル準拠の教育では、それぞれのジャンルに見られる構成、文体、語彙使用などのパターンを認識することの重要性を説く。しかし、そのような構成・文体・語彙の使用がどのような効果をもたらし、そのジャンルの目的を果たすためにどのように役立つかを理解するのも重要である。

例えば、ビジネスに重要なジャンルの一つは「宣伝」「交渉」「説得」などと考えられるが、「宣伝」の場合の目的は、説得力をもって人の関心を引きつけることが重要である。そこでは、文末のモダリティ表現や、商品によってはオノマトペを用いた描写が役立つであろう²⁾。コミュニティ領域の運用能力に含まれる「人間関係に配慮した応答」では、好感を持たれる応答や社交性などに効果のある言語使用が望まれると考えられる。どのような場合の応答かにもよるが、このジャンルでは、応答詞、相槌、モダリティ表現の使用が重要であろう。しかし、使用の効果や目的遂行にどのように役に立つかではなく、あるジャンルのテキストの構成・文体・語彙のパターン (の模倣) を重視しすぎることは、母語話者の規範に基づく指導や評価につながる可能性がある。

各ジャンルで用いられることが慣習となっているテキストの構成・文体・語彙のパターンを認識する

ことには重要であり、ある程度の目的達成・効果が期待できるため、参照すべきではある。しかし、多様な日本語話者が自分らしい日本語を使って社会参加を促すのに重要なのは、その行為の社会的目的を果たすのに効果的な言語使用を行なっているかどうかであり、慣習的なパターンからの逸脱が必ずしも効果の欠如につながるとは限らない。そのため、目的を効果的に達成することをプロフィシェンシーとみなすのが妥当であると考え。

そのプロフィシェンシーをどう測るかは課題であるが、現段階では、各社会的目的に応じたルーブリックを用いた評価で複数の評価者が判断することを提案したい。その複数の評価者に、できる限りその学習者がその発話行為を行う対象とする相手と属性を共有する評価者を含むのが望ましい。

3. まとめ

ここではジャンルという概念を参照して発話行為の目的の到達度を重視して、機能運用能力を考えることを提言した。その機能運用能力の考え方は、発話行為を適切に遂行できる能力を指す語用論的能力と重なるところもある。しかし、語用論的能力の評価は母語話者規範によることが多く、発話行為の目的の達成度が必ずしも重視されない。

今後、多様な日本語話者が多様な聞き手を相手に日本語を使用することを念頭に、様々な聞き手を相手に目標を達成することのできる能力を重視することを提言する。

注

- 1) 正確にはタスク・機能の遂行の他にも場面、話題（日常的・具体的内容、社会的関心事、中朝的話題）、正確さ（わかりやすさ）、テキストタイプ（文の羅列、段落、複段落）なども参照してレベル判定がなされる。
- 2) 行木・岩崎（2019）は初級の日本語学習者を対象に広告・CMにおけるオノマトペに焦点をあて、学習者にオノマトペの効果の気づきを促す実践の成果を報告している。

参考文献

- 鎌田修・嶋田和子・伊東祐郎・李在鎬（2016）「新しい日本語会話テスト『JOPT』」, 2016年日本語教育学会秋季大会予稿集.
- 行木瑛子・岩崎典子(2019) 「ジャンル準拠の初級オノマトペ指導 ―広告の翻訳活動を通して―」『日本語教育』174 日本語教育学会.
- ACTFL (2012) ACTFL Proficiency Guidelines 2012.
<https://www.actfl.org/publications/guidelines-and-manuals/actfl-proficiency-guidelines-2012> (2019年10月12日閲覧)
- Feak, C. B. (2013) “ESP and speaking”. In B. Paltridge & S. Starfield (eds.). *The handbook of English for specific purposes*. John Wiley & Sons. pp. 37-50.
- Hyland, K. (2007) “Genre pedagogy; language, literacy and L2 writing instruction”, *Applied Linguistics*, 20 (3), pp.341-367, Oxford University Press.
- Johns, A. M. (2008) “Genre awareness for the novice academic student: an ongoing quest”. *Language Teaching*, 41 (2) pp. 237-252.
- McCarthy, M. (2001) “Language as discourse: speech and writing in applied linguistics”, in *Issues in applied linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 92–117.
- Paltridge, B. (2013) “Genre and English for Specific Purposes”. In B. Paltridge & S. Starfield (eds.). *The handbook of English for specific purposes*. John Wiley & Sons. pp. 347-366.